

選択理論による情報化社会における教育の考察

榎本 守伸[†]

別府大学[†]

1. はじめに

情報通信技術の発達によって、知識は記憶装置に蓄積され、人は必要な時にいつでもネットワーク等を通じて瞬時に知識を得ることが可能になった。

従来より教育では知識の習得に重点がおかれてきたが、現在でも入学試験や資格試験などにおいて、ネットで検索することで容易に解答が得られる問題が多数出題されている。しかし、そのような知識を習得することの重要性は、情報化社会の進展に従って今後ますます減少していくものと考えられる。

このような情報化社会に対応できる今後の教育のあり方について、アメリカの精神科医ウィリアム・グラッサーが提唱し、カウンセリングでの臨床や教育分野でも成果をあげている選択理論によって考察する。

2. 選択理論とは

ウィリアム・グラッサーは精神科医としてのカウンセリングなどの経験を通じ、不幸な人はすべて重要な人間関係にトラブルを抱えていることに気づき、その問題の根本的な原因は外的コントロールにあるとした。

外的コントロールとは、「人は外側から動機付けられる。」「人はコントロールすることができる。」「自分も人によってコントロールされる。」とする信念であり、権力を持つ者、すなわち政府の要人、親、教師、企業の管理者、宗教家などに支持され社会に広く浸透しているとする。

しかしこのような従来の外的コントロールは人の基本的欲求のひとつである自由と相容れないため、人間関係のトラブルの解消には限界があり、新たな枠組みとして彼は選択理論を提唱した。

2.1. 選択理論の基本概念

選択理論には「5つの基本的欲求」「全行動」「上質世界」「創造性」という4つの基本概念がある。

「5つの基本的欲求」とは、誰もが生得的に持っている欲求であり、身体的欲求である「生存」と心理的欲求である「愛・所属」「力」「自由」「楽しみ」の5つからなり、人の行動の源となる。

人間の行動を全行動という概念で説明し、人の行動を「行為」「思考」「感情」「生理反応」の4つの要素に分けてとらえる。行為とは歩く、話す、食べるなどの動作であり、思考とは考える、思い出す、想像するなどをいう。また感情とは喜怒哀楽などであり、生理反応とは発汗や呼吸、内臓の動きなどをいう。

選択理論では人は行為や思考を選ぶことによって、全行動を自分自身で選択することができるとする。

例えば走る行為を選ぶことで心拍数を変化させ、思考を選ぶことによって物事の捉え方を変え悲しい感情に変化を与えることができるなど、人は行為と思考を選ぶことによって感情と生理反応を直接間接にコントロールできるとする。

カウンセリングにおいては、例えば「私は私を悲しませる」ではなく「によって私は悲しむという選択を、自ら選んでいる」という視点をクライアントに与える。それによってクライアントは自分の立場が不可避なものではなく選択の余地があるものであることに気づく。その気づきが思い詰めたクライアントに別の可能性を思い起こさせ、カウンセリング効果をあげる。

全行動をドライブするのは5つの基本的欲求を満たそうとする願望であり、人は5つの基本的欲求の1つ以上を満たす人・もの・状況・理想・信念などがある特別な記憶の世界をもっており、それを「上質世界」と呼ぶ。

上質世界の三要素は 一緒にいたいと思う人。

最も所有したい、経験したいと思うもの、行動の多くを支配している思想や信条などであり、それはその人に欲求を最も満足させてくれる具体的なイメージを与える。例えば恋人や最も親しい友人、好きな食べ物や欲しいもの、行きたい場所や趣味、思想信条などである。このような自らの上質世界に従って自分の全行動を選択することを内的コントロールと言う。

一方外的コントロールは罰や報酬などによっ

Consideration of education in an information society by Choice Theory

[†]Morinobu Enomoto, Beppu University

て人を外部からコントロールしようとするものであり、具体的には批判する、責める、文句を言う、ガミガミ言う、脅す、罰する、褒美でつるなどの7つの習慣で特徴づけられる。それを受けた人は相手を自分の上質世界から排除する傾向があり良好な人間関係を破壊する原因となっている。

「創造性」とは、既に知っている行動では求めているものが得られないとき、求めるものを得るため、別の新しい行動のための新たなアイデアを生み出す脳の働きをいい、誰にでも存在する能力である。

3. 選択理論による教育の考察

教育が効果的に行われるには、その教育者や教育内容が学習者の上質世界に入っていることが重要である。しかし、学習者が意味を見いだせない知識の教育を外的コントロールで行うことにより、教育者やその教育が学習者の上質世界から締め出され、そのことが教育問題を生むひとつの原因になっていると考えられる。

学習者が意味を見いだせない知識とは、学習者の5つの基本的欲求を満たすことに関係しない知識、あるいは学習者がその知識が5つの基本的欲求を満たすものであることを理解していない知識であり、学習の場以外では使わない試験のためだけの知識や、その知識を実社会でどう生かすかを教えられていない知識である。

人は本来母国語や生活していくうえでの習慣や文化、例えば料理の方法や趣味の内容など実に多くのことを能動的に学習する。人は5つの基本的欲求を満たすための知識を進んで学ぼうとし、それらの知識を学ぶことはその人の上質世界を構成している。しかしまた、そうでない知識に対して相対的に関心が低いことは自然である。関心の低い学習者に対し、教育者が外的コントロールを用いて対応することが、学習者がその教育者や学習内容を自分の上質世界から締め出し、一層のその教育内容に対する無関心や教育者との対立を引き起こす原因となっている。

同じ教育内容であっても社会環境の変化で人々の5つの基本的欲求を満たすことに役立つものであったものが、そうでなくなる場合がある。

例えば進学率の低い地域や時代では、その教育内容を学習することが、就業機会の増大をもたらす生存の欲求や愛・所属の欲求、力の欲求などを満たすことに直接的に貢献するが、進学率の高い地域や時代では同じ教育内容が、就業

機会の増大をもたらさず、学習者に対して5つの基本的欲求を満たすために貢献するものではなくなる。

情報化社会においては、知識を記憶することがそれ以前の社会と比較して同じことがあてはまる。

4. 選択理論による情報化社会における教育

今後ますます進展する情報化社会においては一層知識の習得の重要性は低下していくと考えられる。

しかしながら、学習者が生存をはじめとする5つの基本的欲求を満たそうとすることに変わりはなく、そのために必要な能力は常に存在する。ウィリアム・グラッサーは、教育は「知識の習得」から「知識を使い、知識を改善すること」へ変える必要があるとする。

選択理論による枠組によって教育機関には人が5つの基本的欲求を満たす選択を適切に行うために現在社会にはどのような選択肢があるのか、そのような情報を社会から適切に得るための方法論や、それらの情報を解釈、選択するための方法論、既存の知識を改善するための方法論が求められてくると考えられる。

また人が内的コントロールによる選択を行うためには、判断基準となる上質世界が必要であり、よりよい上質世界を得るための心理学的アプローチが有効であり、選択理論の4つの基本概念のひとつである創造性を発揮するための方法論も重要性を増していくものと考えられる。

加えて教育機関や教育者が学習者や利害関係者と上質世界を共有するための方法論も重要となるであろう。

教育機関が人の根源的な欲求を適切に満たす能力を教える限り、情報化の進展した社会を含め、どのような社会や時代においても、その教育機関や教育内容の存在意義が失われることはなく、選択理論はそのような教育に対応するためのひとつの枠組みを与えると考えられる。

参考文献

- ウィリアム・グラッサー [2009] 『グラッサー博士の選択理論』アチーブメント出版
- ウィリアム・グラッサー [2007] 『あなたの子供が学校生活で必ず成功する法 なぜ、この学校には落ちこぼれが一人もいないのか?』アチーブメント出版
- ウィリアム・グラッサー [1994] 『クオリティ・スクール 生徒に人間性を』サイマル出版会
- ウィリアム・グラッサー [1977] 『落伍者なき学校』サイマル出版会